愛知県被災者支援センターニュース　第113号 令和元年11月25日発行

あおぞら

発行：愛知県被災者支援センター
住所：名古屋市中区三の丸3-2-1
愛知県東大手庁舎1階
TEL：052-954-6722
FAX：052-954-6993
開館：月曜～金曜　10時～17時



飛島村・西尾さん家の柿採り

募集中！

≪表紙の絵/作品/写真≫

①絵/作品/写真のタイトル、②簡単な説明、③掲載する氏名またはペンネーム、年齢、④連絡先（氏名、メールアドレスまたは電話番号）を明記のうえ、メールまたは郵送にてお送りください。

問合せ先・送り先：メールフォーム➡
●TEL：052-954-6722
●E-mail：aozora@aichi-shien.net
●住所：〒460-0001 名古屋市中区三の丸3-2-1 愛知県東大手庁舎1階

≪もくじ≫

P1．表紙写真「飛島村･西尾さん家の柿採り」
P2．ふくしまツアー交流会@いわき
P3．『福島子ども健康プロジェクト』調査報告－「福島県中通りの生活」
P4．イベント情報、レシピ「さつまいもゴロゴロケーキ」、編集後記に変えて

「ふくしまとあなたとをつなぐ交流・相談会」@いわき

福島県から愛知･岐阜･三重に避難されている方々を対象とした交流･相談会が、11/16（土）にいわき市労働福祉会館で行われ、愛知県から 7 世帯 11 名（大人 8 名・子ども 3 名）、岐阜県 3 名、三重県 1 名、その他関西から 12 名、愛知や関西から帰還された方 4 名が参加しました（主催：認定 NPO 法人レスキューストックヤード･ふくしま支援室、共催：NPO 法人全日本企業福祉協会大阪・チームおせっかい）。



原発 ADR センターの申立てに関する説明と個別相談司法書士会の個別相談、いわきのチャイルドケア･トータルサポートサービス「**Wendy~ウェンディ~**」の活動紹介も行われました。



その後、避難元のグループに分かれて話し合い、初対面の人たちは自己紹介し合い、また帰還された方とは再会を喜びました。その交流内容や参加者のアンケートによると、次のような声や意見がありました。

［相談・交流会の感想］について

元福島県民の方々に出会えて、いろいろな話に花が咲いた／久しぶりに心を開いて語り合うことができて楽しかった。安心した／同じ境遇の方のお話が共有できたのが一番良かった／経済的に難しい中、帰省が可能になりありがたい／帰還についても意見が聞けて、とても参考になった／司法書士の方と相談できて良かった／ADR に申し立てができ、一歩前進して良かった



［困りごと］について

近い将来、子どもが巣立った後、避難か帰還かの岐路が待っている／今後の生活について、不安･迷いがいろいろある／悩み相談ができる相手が欲しい／親に孫を合わせる機会が少ない／原発事故後･避難時等のフラッシュバック／夫と別に暮らしているので、子育てが母親だけで偏りがち、疲れが取れない／二重生活となり、家計が苦しい



［今後交流会に望むこと］

継続してほしい／またこの様な企画があるとうれしい、福島に来るきっかけになる／交流会の情報提供を今後も続けてもらえたらありがたい／これまで支援してもらっているので、台風 19 号で台風被害に会った人たちに何か恩返しがしたい

［つながり作り］について

交流会で他県の同郷の方々と知り合えて良かった／顔なじみでもゆっくり話をすることがなかったが、今回はいろいろ話ができた／皆さんの状況を知って元気が出た／新しい友だちもできて、連絡先も交換したので、本当に良かった

あれから８年半、「避難生活は？」「福島での生活は？」「戻った人は今？」②

愛知県被災者支援センターは、東日本大震災による地震・津波・原発事故から避難している方、被災地に留まっている方、帰還された方のいずれの考え･立場も尊重しながら支援を行っています。

今回は成 元哲（ソン ウォンチョル）氏(中京大学)らの「福島子ども健康プロジェクト」(⋆右 QR コード)が、2013 年から福島県中通り 9 市町村の親子を対象に実施している「福島原発事故後の生活と健康に関する調査」をご紹介します。中通り 9 市町村は自主避難等対象区域で局所的にホットスポトも存在し、健康影響の不確実性が高く、リスク認知や対処行動の違い・補償格差等による葛藤や分断が生じやすい地域です。それぞれの立場の人や被災地以外の人々との“分断”を埋め、互いに共感できる環境を整えたいと、成氏らは 2013 年 1 月から毎年アンケート調査と現地でのインタビュー(2008 年度出生児 6,191 名とその母親を対象)を続けられています。第 7 回までの調査報告(2019 年 4 月時点で 805 名が回答)から、福島県中通りの皆さんの暮らし方や思い、悩みなどを知ることができます。

同氏は、原発事故が人間の「からだ」「こころ」「きずな」に長期的にどのような帰結をもたらすのかを記録し、必要な施策につなぎたいと言われています。**「福島原発事故後の親子の生活と健康に関する調査報告書」**（2019）と講演録等から、同氏のアドバイスを受け簡略にまとめました。(文責あおぞら編集委員)

◎子どもの健康：

2015 年以降［良い］が約 64～70%、2019 年は［良い/まあまあ良い］が 97%を超えていて、健康状態は「良好」である。身体症状は、「皮膚のかゆみ」が約 52%と最も多い。

◎母親の健康：

2015 年以降［良い/まあまあ良い］が約 81%で、「おおむね良好」である。身体の自覚症状は、「頭痛」約 62%、「肩こり」76%、「腰痛」約 60%、「皮膚のかゆみ」約 48%と高くなっている。心の健康状態では、「イライラ･怒りっぽい」63.5%、「疲れやすく身体がだるい」62%等と訴えているが、更年期症状とも重なる。

◎原発事故後の生活変化：

地域の放射能汚染について、［深刻ではない/あまり深刻ではない］が 72.6%となり、除染･汚染土撤去で地域の放射能汚染の認識が低下している模様。

◎生活変化の 4 つの傾向(数値は 2019 年のもの)

①高止まり型：

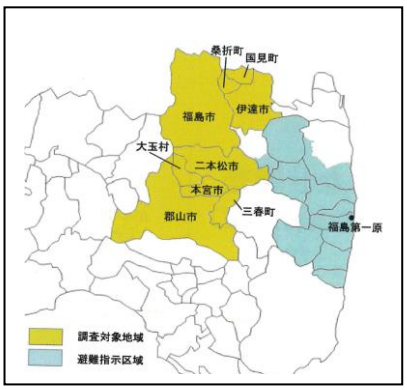
「補償をめぐる不公平感」66.6%、「放射能情報に関する不安」56.5%、「いじめや差別への不安」52.2%

②ゆるやかな減少型：

「健康影響への不安」43.9%、「経済的負担感」41.6%、「保養への意欲」35.5%、「子育てへの不安」31.5%

③横ばい型：

「地元産の食材を使用しない」11.8%、「洗濯物の外干しない」22.7%、「避難願望」11.7%



④一定推移型：

「放射能への対処をめぐって配偶者、両親、周囲の人との認識のずれ」が、それぞれ 14.8、17.9、17.1%である。

◎「子どもの将来」の心身の健康への影響：

40%以上が懸念している

◎「保養」：

「出かけていない」が増加し(55.2%)、「たまに出かける」(39.8%)と「よく出かける」(5%)より多いが、不安を言える、もやもやを共有する場になっている。

◎モニタリングポストの撤去：

66.3%が撤去に反対で、その理由は、「線量がわかると安心」、「廃炉作業が終わるまでは何が起こるかわからない」、「風化させないため」が多い。

◎その他：

「原発事故の風化」約 90%、地域で住み続けたい 90%、「生活が元に戻ってきている」53%、地域で放射能について「話題にしにくい」約 30%

12 月イベント情報

※イベントの一部を掲載しています。

開催日	イベント名	内容（主催など）	最寄駅
12 月 7 日(土) 13：00～16：00	福島の高校生「**ドイツ派遣＆再生可能エネルギー見学･報告会**」(会場:ブラザーミュージアム 避難者無料)	「福島･ドイツ高校生交流プロジェクト」に参加した被災高校生による報告会（主催:アースウォーカーズ/チェルノブイリ救援･中部）	名鉄名古屋線「堀田駅」2 分/地下鉄名城線「堀田駅」①出口 3 分
12 月 14 日(土) 10：00～13：00	**「なごやであそび隊･学習支援に参加しよう！」**	学習支援が始まります。(問合せ:愛知淑徳大学 CCC) 持ち物:お弁当、飲み物、学習用具	地下鉄東山線「星ヶ丘」③出口 3 分

のりちゃんのレシピ・さつまいもゴロゴロケーキ（炊飯器を使って）




材料：〔A：さつまいも 200ｇ、砂糖 20～30ｇ〕
ホットケーキミックス 150ｇ、卵 4 個、無塩バター40～60ｇ、砂糖 50ｇ、サラダ油適量
（＊砂糖、バターはお好みで加減する）

作り方：

① 〔A〕のさつまいもは 1 ㎝角のサイコロ切りにし、水にさらす。無塩バターは常温に置いておく。卵は割りほぐしておく。

② 鍋で〔A〕の砂糖と①のさつまいもをヒタヒタの水で、さつまいもが柔らかくなるまで煮る。

③ ボウルにバター、砂糖を入れ、白っぽくなるまで空気を入れるようにして泡だて器で混ぜる。

④ ③に①の卵を少しずつ加えながら、分離しないよう混ぜ合わせる。

⑤ ④にホットケーキミックスを加え、ヘラで粉ムラがないように混ぜ、②のさつまいもをくずさないようざっくりと混ぜる。

⑥ 炊飯器(5 合炊き)の中釜にサラダ油をなじませ、⑤の生地を流し入れ上面をならして、〈白米炊飯〉のスイッチを入れる。スイッチが上がり、生地の上面にとろみがあれば、再度スイッチを入れる

⑦ 焼きあがったら粗熱を取り、切り分ける。

＊さつまいもの他、カボチャ、リンゴでもおいしい。

≪編 集 後 記 に 変 え て≫

・10 月も終わる頃、主人が 1 週間程出張で家を留守にした。長野市へ被災者支援部隊として職場から送られたのだ。福島では沢山の支援を頂いた身。「しっかり恩返しをしなくちゃダメよ」と送り出した。

・現地での仕事は、保健師と共に被災者さんの自宅へ訪問し、身体的な不安の有無を伺うこと。「多くのお宅へ伺ったが、まだまだ伺いきれないご家庭がたくさんあった」とのこと。

・被災者支援というと、てっきり避難所の手伝いや避難所での困り事に傾聴することだと思っていたが、実は[避難所にさえも何らかの理由で足を運ぶことが出来ない方々をいかに見つけ出す事ができるか]が大変重要な支援であることに、実際に支援する側になって分かったとのこと。被災者と一括りで言っても、被災した場所や家族構成、身体の程度や年齢、性別など、当たり前であるが皆様々なので、必要な支援も千差万別で、「その声を多く拾う事の難しさを実感した」と帰って来てから申しておりました。

・浸水で被災したご家庭に伺い、泥でまみれた畳や家具類を目の当たりにすると、ここから再建するための膨大な精神的、肉体的そして金銭的な苦労を思うと、どんな言葉かけも薄っぺらな無意味なものに感じてしまう。「支援とは何だろう」と考えさせられる 1 週間だったそうだ。

・私も、主人の留守を預かる間、長野市の天気を気にし、雨の情報に無事を祈る日が続き、離れて暮らす家族の想いを思い出した 1 週間であった。

・全ての人々が心穏やかに生活出来る日が訪れる事を願わずにはいられない今日この頃です。(O.K)